

スポーツ映画における指導者による励まし表現の日米語対照研究

異文化コミュニケーションゼミナール 1315004 浅野 徹

1. 研究動機・研究目的

今日、日本においても異文化理解の重要性が高まってきている。さらに、2020年の東京オリンピック開催に伴い、世界中から様々な人々が集まることになり、実際に異文化理解を行動や態度に取り込む必要性が高まるのは必至である。スタッフだけでなく一般市民の理解も必要になる。また、日本を訪れる外国人が増加している。ここでも異文化理解が必要となる。そこで、本研究を進めていく中で、少しでも異文化理解を深め考察してみたいと考えた。

まず、日本と米国に注目してみても、それぞれの文化には様々な違いがみられる。その一つにスポーツ文化の違いが挙げられる。例えば、日本では試合に勝ったときや大会などで優勝したとき、監督や選手の引退試合をしたときなど、様々なスポーツシーンで胴上げが見られる。しかしこれは日本特有のものであり、米国では握手やハグで表現されることが多い(新川, 2017)。筆者自身、米国の4大スポーツと言われている野球、アイスホッケー、バスケットボール、アメリカンフットボールの試合を実際に米国で観戦した。その際に、会場全体の雰囲気や観客の応援の仕方など、日本と米国で異なるものを感じた。例えば、米国の応援は、アメリカ人の陽気な性格がよく表れているように感じられた。このような日本と米国のスポーツ観戦時の応援の仕方や雰囲気などのスポーツ文化の違いは、それぞれの国でスポーツをする環境が違うからだと考えられる。そして、スポーツをする環境の違いは、指導者の指導の仕方、つまり、指導者が選手に発する声掛けが大きく関係しているのではないかと考えた。そこで、本研究では、日米のスポーツ映画を用いて、指導者の選手に対しての声掛けに焦点をあて、分析・比較することで、言語面、コミュニケーション面における日米のスポーツ文化の相違点・類似点を明らかにすることを目的とした。

本研究を進めていくにあたり、関連の深い異文化コミュニケーション、非言語表現、日米のスポーツ文化、指導者の選手に対する声掛け、励まし表現についてなどの先行研究を十分に検討した。先行研究の検討を踏まえ、指導者の励まし表現について言語面、非言語面に焦点を当てた。そのため、発話の内容、主語、文型、時制などの項目に分けて分析・比較した。さらに、非言語表現についても検討した。分析結果をもとに、日米語での類似点・相違点などを考察し、そこから考えられる日米のスポーツ文化の類似点・相違点を明らかにした。

2. 研究方法

本研究では、スポーツを題材とし、指導者の発話シーンがある映画を分析対象とし、日米の上映時間に偏りが出ないようにした。日米語のスポーツ映画における「指導者の選手に対する発話」を発話の内容、主語、文型、時制の4項目に分けて分析・比較した。さらに、非言語表現についても検討した。データを集計し、使用回数と使用頻度を調べた。使用頻度は使用回数を合計で割り、算出した。分析結果をもとに、日米語での類似点・相違点などを考察し、そこから考えられる日米のスポーツ文化の類似点・相違点を明らかにした。

3. 主な結果と考察

全体として励まし表現は米語の方が多という傾向があることが示された。「指導者の選手に対する

発話」の内容の分析において、日米語での相違点は、指導者の選手に対する発話数が米語の方が2倍以上多かった点である。これは、日米文化の違いが表れていると考えられる。日本には察する文化があり、発話数がそもそも少ないという理由が挙げられる。一方で米国では、自分の意見を積極的に発言することが多いため、発話数が多くなる理由の一つに考えられる。

次に、日米語の類似点は2点ある。1点目は、「励まし表現」が日米語とも8割を占めている点である。このことから、スポーツの指導者は選手に対して、「励まし表現」を多く使うことにより選手のやる気、モチベーションを保ちながらチームを指揮していることが考えられる。今回の分析に使用した映画では、日米語ともに指導者の励まし表現は選手のモチベーションを高めることに大きく影響していた。特に、試合中の重要な場面での指導者の声掛けは、勝敗を分ける大きな役割を担っていた。

2点目は、「叱る表現」が日米語ともに少なかった点である。このことから、基本的に叱ることは選手の自信を損なわせ、最大限の力を発揮することができなくなるため、日米ともに「叱る」表現は少なくなっていると考えられる。しかし、先行研究で検討した際の例では、競技志向の高い選手を指導する際は、ネガティブな声掛けからやる気を喚起するという結果があったため、一定の条件下においては効果があると考えられる。また、本研究の分析資料は映画であるので、各言語の language attitudes が反映されている。実際の言語使用とは異なるが、日米語の language attitudes が表れている点において、興味深い結果が得られた。

非言語表現の分析において日米語での相違点は、ジェスチャーの使用回数が日本語の方が2倍多い結果になった点である。一般にはアメリカ人のほうがジェスチャーが多いと思われがちだが、実際は日本人の方が多いということが確認された。先行研究と同様に、本研究のデータも stereotype と実際の行動が異なることを示した。

4. 結論

本研究から得られた日米語の類似点は、指導において、叱る表現や否定の表現は少なく、励まし表現を多く使用し、指導者は主語を省略することが多い点である。相違点は、米語は発話数が多く、言語でのコミュニケーションを多く取る。日本語はジェスチャーの使用が多く、特にガッツポーズが多くみられた。今回の研究の結果から、言語面、コミュニケーション面における日米のスポーツ文化には、それぞれの文化的背景が大きく影響していることが観察された。また、日米語の language attitudes における類似点と相違点が示され、興味深い研究となった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

順天堂大学で過ごした4年間は、私にとって本当に有意義なものであった。様々なことに挑戦し、自らを成長させることができた実感している。大学生活で関わったすべての方に、この場を借りて感謝したい。特に、英語力をつけることができたのは、須藤先生が熱心に指導し、励ましてくださったおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいである。また、ここまで頑張ることができたのは、仲間の存在も大きかったと感じている。苦楽を共にした仲間は、一生の宝物である。最後に、卒業論文の執筆をサポートしていただいた、須藤先生、蒲原先生、ゼミ生に感謝の意を示したい。